



9784892534935



1929402020005

ISBN978-4-89253-493-5

C9402 ¥2000E

定価(本体2,000円+税)

文生書院

ISSN 1347-2775

Intelligence

インテリジェンス
Vol. 12

「特集」
プランゲ文庫研究の10年

文生書院

Intelligence

20世紀メディア研究所刊

March, 2012

Volume 12

「特集」プランゲ文庫研究の10年

- プランゲ文庫とデータベースの完成
- 占領期(1945~1949)GHQの出版物検閲
- 占領下日本の情報宇宙と「原爆」「原子力」
- GHQ検閲と「古典」評価の変容
- GHQ占領期における在日朝鮮人団体機関紙の書誌的研究
- 戦後占領期の朝鮮人学校教科書に見る「民族意識」

20世紀メディア研究所刊

占領下日本の情報宇宙と「原爆」「原子力」

——プランゲ文庫のもうひとつの読み方

加藤 哲郎

1 はじめに — 占領下の日本で原爆報道は消えたか？

本稿は、2011年10月15日、20世紀メディア研究所第63回研究会での筆者の報告「占領下日本の『原子力』イメージ — ヒロシマからフクシマへの助走」を、方法論的に吟味し、内容を補足するものである。3月11日の東日本大震災・福島原発事故に触発された当日の報告そのものは、すでにウェブ上に公開し、多くの反響を得て、データや参考文献リストは更新されつつある (<http://members.jcom.home.ne.jp/katote/Occuatom.html>)。

報告当日は幸い多くの研究者・メディア関係者の出席を得、『東京新聞』10月25日「メディア観望」、『毎日新聞』11月2日「ことばの周辺」などでも取り上げられた。

■「安全神話」の背後にあった「占領期原爆報道の消滅」神話

報告では、故高木仁三郎が「日本を滅ぼす9つの呪縛」として挙げた、①原子力は無限のエネルギー源、②原子力は石油危機を克服する、③原子力の平和利用、④原子力は安全、⑤原子力は安い電力を供給する、⑥原発は地域振興に寄与する、⑦原子力はクリーンなエネルギー、⑧核燃料はリサイクルできる、⑨日本の原子力

技術は優秀（『原子力神話からの解放』講談社文庫）にならって、①原爆はナチス・ドイツへの必要悪、②原爆で早期終戦・犠牲最小化、③日本は唯一の被爆国、④原子力時代=第3の火、⑤国連・国際管理で平和利用できる、⑥科学者の良心で統御可能、⑦社会主義の核は平和のため防衛的、⑧核兵器は抑止力、原発は潜在的抑止力、⑨日本人の核アレルギー、⑩占領期原爆報道の消滅、を歴史的・政治的「原爆・原発神話」とした。そして「原子力の平和利用」に導いた神話として、さしあたり「占領期原爆報道の消滅」を資料的に検討し確かめる手法を採った。

そのさい念頭においていたのは、1945年9月21日GHQ「プレスコード」以降の原爆報道の検証である。占領終了直後から、「原子力問題」についての検閲はきびしく、もちろん広島、長崎の有様、原爆の残酷性など書くことは許されなかった時代」と描かれた（武谷三男『続・弁証法の諸問題』1955「はしがき」）。プレスコード以前の8月敗戦時は原爆報道が溢れていたのに、「占領が終わるまでは、マス・メディアによる原爆に関する報道は一切姿を消す」（袖井林二郎「原爆はいかに報道されたか」、原爆体験を伝える会編『原爆から原発まで — 核セミナーの記録』上、アグネ、1975）、「原爆報道をやらうと思えばできた時代だ」が「原爆報道はあまりなかった」（朝日新聞記者岩垂弘「報道に見る原爆と原発」同前）とも述べられた。ごく最近でも、「原爆が書けないことは記者のだけれども知っていた」（『朝日新聞』「原発とメディア：『平和利用』への道⑥」2011年10月11日夕刊）と、「占領期原爆報道の消滅」が繰り返えされてきた。

■ 検閲された原爆報道、検閲をくぐった原爆・原子力記事

確かに、占領軍による原爆被害・被ばくについての報道統制と検閲については、モニカ・ブラウ『検閲 1945 - 1949: 禁じられた原爆報道』（時事通信社、1988）、堀部清子『原爆 表現と検閲 — 日本人はどう対応したか』（朝日選書、1995）、笹本征男『米軍占領下の原爆調査：原爆加害国になった日本』（新幹社、1995）、高橋博子『封印されたヒロシマ・ナガサキ — 米核実験と民間防衛計画』（凱風社、2008）、繁沢敦子『原爆と検閲：アメリカ人記者たちが見た広島・長崎』（中公新書、2010）など、多くの研究がある。

それに対して、実際に検閲され、検閲をくぐって報道された記事や論説についての研究は、ほとんど見られない。この側面は、プランゲ文庫「占領期新聞・雑誌情報データベース」を管理・運営する20世紀メディア研究所の独壇場で、中川正美「原爆報道と検閲」（『インテリジェンス』3号、2003）、御代川貴久夫「占領期における『原子力の平和利用』をめぐる言説」（山本武利編『占領期文化をひらく』早稲田大学出版部、2006、所収）、小野耕世「思い出の『原子力時代』」（『インテリジェンス』11号、2011）などを送り出してきた。

とりわけ御代川論文は、2006年当時入力されていた雑誌論文から、主として科学雑誌をとりあげ、早くから「原子力の平和利用」が語られ論じられてきたことを、明快に示した。したがって、筆者の報告の主眼は、御代川論文の素材にその後入力された西日本の新聞記事100万件分を補い、1975年の袖井・岩垂論文でパスされた1945年9月以降49年末までの時期のメディア情報を見直し、「占領期原爆報道の消滅」神話を再検討することであった。

その検証にあたって、筆者は、プランゲ文庫「占領期新聞・雑誌情報データベース」からキーワード検索で抽出した「原子爆弾」「原爆」「原子力」各1500件をサンプルに用いた。それは量的に十分であると前提して解析した。しか

しそれが「多いか少ないか」は断定しなかった。ところが『毎日新聞』「ことばの周辺」では「意外と多い」と紹介された。報告では、たまたまチェックしたキーワード「吉田茂」や「封建」と同じくらい論じられているとしたが、「多い」とまでは考えていなかった。そこで、その分析方法を敢えて検証し、あわせて報告後に入手したデータにより内容的補正を加えることにした。

2 占領下日本の言説空間 — プランゲ文庫のキーワード・クラウド

■ デジタル言説宇宙としてのプランゲ文庫

デジタル時代の到来は、歴史的事象の研究にも、新たな方法をもたらす。新聞記事データベースからキーワード検索で記事掲載頻度を抽出し時代の流れを読む手法は、メディア分析でも当たり前になってきた。政治的争点や個人の露出度についても、歴史の研究書や教科書の記述を離れて、むしろ予断を排して「時代」を検証する手法が必要ではないか。20世紀メディア研究所の誇る「占領期新聞・雑誌情報データベース」で言えば、すでに刊行された『占領期雑誌資料大系（大衆文化編・文学編）』（岩波書店）のように、特定のテーマや問題に即して新聞・雑誌記事を見つけ、検閲の有無を含むその内容を分析するオーソドックスな方法もあるが、むしろそのテーマや問題が、同時代にどの程度に浸透し語られていたかを、さまざまな言説のマトリクス・星座の中において、どのようなテキスト・コンテキストの中で意味づけられたかを探る手法もありうるのではないか。

若いメディア研究者のために種明かしすれば、こうした手法が、21世紀に世界大学ランキングや大学・研究者評価に採り入れられ、「社会的貢献度」の測定や研究費の配分に猛威をふるうようになった。その世界で生き抜くためにも、プランゲ文庫「占領期新聞・雑誌情報データベース」のような巨大データベースの活用が習熟することが求められる。

■ 300万件の言説宇宙から星雲・星団・星座 をみつけ恒星・流星を見分ける

ブラング文庫は、米国メリーランド大学が所蔵する占領期日本の雑誌、新聞、図書などメディアの包括的コレクションである。「占領期新聞・雑誌情報データベース」には、ブラング文庫所蔵の全雑誌全号の表紙・目次から著者名、記事・論文タイトル名、本文小見出し、検閲に関する情報、巻号、発行所（出版者）、発行年月日、発行地などの情報が、2005年3月31日までに約200万件が入力された。また日本新聞協会加盟紙全記事の見出し、記事冒頭80字（リード部分がある場合はリードのみ）、人名、国名、地名など固有名詞（各記事最高5個）、検閲の有無、写真の有無（ある場合はキャプション）、掲載紙名、掲載日、掲載ページ、発行形態（朝刊・夕刊・附録・号外）、広告（広告主、商品名）が、2011年12月までに、九州・四国・中国・関西・中部地方の100万件以上が入力されている。

以上の総計約300万件の雑誌・新聞記事によって、「占領期新聞・雑誌情報データベース」は構成されている。メリーランド大学内でも分散し入力困難な刊行書籍、東京に本社を持ついわゆる全国紙と東日本の地方新聞が未入力であるとはいえ、占領期の言説世界を鳥瞰するには、十分なデータ量である。

ただし占領期メディア全体の言説状況、特定のイシューについての領域横断的研究に用いるには、その目的に即して関連キーワードを幅広く検索した自家版データベース作成が必要になる。本稿の「原爆」「原子爆弾」「原子力」記事・論説の解析は、この方法を用いる。基礎データに雑誌・新聞の発行部数や売れ行き・重要度を加味してポイント化・ウェイト化したり、複数キーワードの掛け合わせによる相関係数・回帰分析等々もありうるが、ここでは省略する。若い研究者の、本稿にならったチャレンジを期待する。

また、占領期には多くの外国人が日本に駐留し、英語の新聞・雑誌も日本で刊行されていた。

データベースにはこれらも入っており、日本語中心のブラング文庫大宇宙の中の小宇宙を構成している。たとえば英語ではmedia 3536なのに日本語では「メディア」33、逆にjournalism71に対して「ジャーナリズム」10074、intelligence164に「インテリジェンス」18といった用語の差異が抽出可能であるが、今後の研究を待ちたい。

■ 「焼け跡・闇市」は後世の言葉、「占領軍」は「進駐軍」より多い

ブラング文庫のキーワード宇宙には、いくつもの星雲がある。占領期の新聞・雑誌であることを念頭において、1945年9月から1949年12月までのヒット数を見てみよう。2011年12月現在、雑誌では専門誌・文芸誌・同人誌から労働組合機関紙・共産党細胞新聞まですべて、新聞では九州から中部地方の西日本で刊行されたメディアを網羅している。

任意に地名を打ち込むと、「日本」932426のなかで、「東京」1147114が最大で、「大阪」126168「広島」125598「福島」22400が、（東日本の新聞記事が未入力のもとでの）占領期情報戦の地政環境となる。筆者が検索した人名を含む約1000のキーワード中で「東京」が最高であったから、1星雲100万が最大と見積られる。また「沖縄」1278は「琉球」323を加えても極端に少なく、占領期メディアの「周縁」となっている。カタカナの「ヒロシマ」1361は『中国新聞』1946年7月池田寿夫の連載マンガのタイトルに始まるが、翌年ジョン・ハーシーの英語本がアメリカで刊行されベストセラーになったニュース報道から広がる。「ノーモア・ヒロシマ（ズ）」20は1848年8月広島被爆3周年報道からである。ただし「被爆」25「被爆者」2は減多に使われず、「唯一の被爆国」はゼロで1950年代のものである。

後の時代にメディアや研究者がこの時代を特徴づけた言葉、「焼け跡」27「闇市」315「買い出し」21などは、意外に少ない。「廃墟」173「虚脱」166も目立たない。「農地改革」1998は了解できるが、「財閥解体」125「男女平等」82も少

ない。「逆コース」にいたっては、歴史用語ではない一般用法を含め7件にすぎない。ある時代を理解するには、ひとまずその時代の言葉で了解しなければならない。「言論」5724と同じ程度に「検閲」4070もトピックになっている。「戦後民主主義」2は、後の時代の特徴づけとなる。

米軍占領下で「占領」が使われなかったわけではない。よく占領軍は進駐軍とよばれたといわれるが、「占領」7734「進駐」1848「駐留」41、「占領軍」2529「進駐軍」1530で、「占領・占領軍」の方が多し。この時代に使われなかったのは、今日ドイツ・沖縄の「直接占領」2と対比される日本の「間接占領」0といった社会科学用語である。

「戦争」9307と「平和」12839には、前後にさまざまな言葉がついてヒットするが、格別に多いとはいえない。「戦後」10433と拮抗している。「終戦」5888と「敗戦」2144も、使い分けられたようには見えない。むしろ「引揚」18312「復員」4730がこの時代を特徴づけ、「賠償」3958「講和」3239「抑留」1094が未決の問題を示唆している。「軍」49178は言葉として残されているが「戦前」2097の方に属し、「兵隊」773「軍隊」622「軍部」465「戦車」116「戦艦」96「毒ガス」57等々は、メディア空間の支配を終えた。

■ 「大東亜戦争」は検閲をめぐり「冷戦」は意識されなかった

歴史の断絶と占領軍の言論統制として、一般に、1945年12月の占領軍指令で「大東亜戦争」の呼称が禁止され、強制的に「太平洋戦争」に置き換えられたといわれるが、新聞・雑誌用語では、それほど明快ではない。小星雲「戦争」9307中では、「太平洋戦争」274「大東亜戦争」46と、そもそも正式名称で呼ぶケースは少ない。

1945年9月21日プレスコード適用直後の朝日新聞『週刊少国民』1945年9月23日には「大東亜戦争は如何に戦はれたか」とある。それは確かに12月占領軍指令前だが、『大分合同新聞』1946年8月14日「終戦一周年を迎へて」

は、「日本が無謀な大東亜戦争を惹き起して、悲惨な敗戦といふ運命を背負ふに至った」と書いて検閲をパスしている。『長崎民友新聞』1949年10月25日記事中では、「南洋庁サイパン高等女学校在学中、大東亜戦争がぼつ発、昭和十九年学生同盟（女子挺身隊）を編成」という具合に、検閲をくぐって堂々と使われ続けた。1945年12月8日の新聞各紙がCIE作成「太平洋戦争史」掲載を開始、翌日から日本放送協会「真相はかうだ」のラジオ放送開始という、GHQによる歴史観置き換え工作の効果は、割り引いて理解した方がよさそうだ。ただし、既に始まっていた「冷戦」36は、ほとんど意識されていない。「原子戦争」も19のみである。

「日中戦争」0は、「中国」115073、「帝国」17275への関心はあっても、「中共」9726「朝鮮」5853「台湾」1868「満州」1742（「満州事変」79）「支那」977（「支那事変」49）「植民地」426「領土」307といった東アジア認識の混沌のもとで、アジアへの「加害者」（74件すべて国内犯罪）意識などはぐくみようもなかった。対外情報は、圧倒的に「アメリカ」30329「米国」20238発で、「ソ連」13141がそれに続く。ソ連は「ソビエト」742や「ソ同盟」176とも表記された。「国際」35825「世界」15874「地球」9428の違いは微妙で、「国連」4987「世界国家」418「国際通貨基金」181といった制度のあり方と関係している。

■ 「自由主義」ではなく「民主主義」の時代、「天皇」は多いが「天皇制」は学術用語

そもそも「歴史」134353の重要性は認識され、大星雲になっている。「近代」9569「現代」8906への関心も強いが、「封建」1734「封建制」372「伝統」1422が「戦前」2097と重なり、「戦後」10433は「民主化」6138とは重なるが、「近代化」362とまでは概念化されない。「哲学」54071は「人生」30884の問題で「知性」804を必要とされるが、まだ「合理主義」62「近代主義」34には行き着いていない。「原子力時代」117は「現代」の一環である。

こうした「イズム」の世界は、独立後の1953年から文部省統計数理研究所「日本人の国民性」調査で戦後日本の「6つの主義」としてデータ化されるが、その「6つの主義」の占領期の布置は、「民主主義」6900「社会主義」2202「共産主義」1706「資本主義」1467「自由主義」542「全体主義」107であった。「ファシズム」286もよく使われたとはいえない。当時の「民主主義」は、「資本主義」「自由主義」よりも「社会主義」「共産主義」と親和性を持っていたと解することもできる。

ただし、「民主」31727「自由」29650「友愛」1048「博愛」1036「平等」804「対等」97からすると、「民主主義」「社会主義」「共産主義」の核心は「自由」で、「平等主義」12とは結びついていなかった。「憲法」29327「新憲法」3163「日本国憲法」232で合法的に議論され、「革命」4264「解放」3976とも結びついていたが、制度的には「議会」42019「選挙」19956「国会」11561と親和性を持つ。「主権」504の転換は意識されなくても、「人権」23275は大いに普及した。

だから、この時代の一大争点とされる「天皇制」688のメディア評価は難しい。「天皇」5464はよく使われているが、社会科学的概念として確立したとまではいえない。「昭和」40351「明治」6800「大正」3525と日常的に使われていても「元号」2の意味は論じられない。「皇室」は392件あるが、「象徴天皇制」は2件にすぎない。

むしろ、かつての歴史の客体「臣民」20が、「国民」34839「人民」9480「市民」8324「大衆」7423「民衆」3020「庶民」1041という主体として登場し、「階級」2365さえも普通に使われるようになった変化が大きい。「主体」1236「ヒューマンイズム」521「主体性」365ともつながる。

ただし「市民」8324は単なる行政客体の用例が多く「市民権」は64件にすぎず「市民主義」はない。「階級」2365の方は、「労働」238311「労働組合」119259という大星雲の圧倒的情報量を基礎に、「スト」53804「デモ」19615「共産党」

9975「同志」8513「メーデー」1265等と結びつき、「労働者」7675「プロレタリア」334「資本家」611「ブルジョア」200「無産」118とも使われた。「青年」は191320、「婦人」65084「女性」17680である。

■「労働組合」星団のなかでの共産党・社会党の輝度

政党の中で「共産党」9975は、「社会党」8754「民主党」5422「自由党」2649よりメディア露出度が高い。これは、「革新3712 保守2904」「進歩3091 反動932」「左派1186 右派345」「左翼469 右翼349」といった当時の政治の分水嶺にも照応する。

だが、この時代をマルクス主義用語の「搾取」297や、「革命」4264の土壌となる「失業」4494「貧」3057「飢」1491のイメージ一色で描くことはできない。むしろ、「夢」16278「希望」12824「期待」6858の方がはるかに多く語られる。あるいは「結婚」32383「恋愛」3947「恋」13010を「愛」114678が圧倒し、「家族」4872より「家庭」21426が多い。ある種の「解放」3976イメージの副産物と考えるべきだろう。

「衣」13748「食」50802「住」102712と打ち込むと、それぞれが多用され小星雲を成すが、どうやら住まいの問題が切実だったようだ。「社会」299545というメディアの扱う小宇宙の中で、「政治」126338や「経済」192646に対し「文化」194821が独自の大星雲になっている。「生活」55532情報が「生産」33101を上回り、まだ「消費」6275や「広告」5340とは密着しない生活世界を成している。「産業」47074でいえば「工業」142333には及ばないが「農業」49473も主要な論題で、「農民」7640は「労働者」7675に肉薄する。

■「希望の文化」としての「科学」

こうしたキーワードの世界で、占領期を一言で特徴づけうるほどの圧倒的頻度で語られる言葉がある。「科学」401010である。これが「原爆・原子力」報道の伏線である。「東京」「日本」には及ばないが、「社会」「文化」「経済」「労働

組合」等々を圧倒する巨大星雲である。「新聞」873151の場合、新聞記事100万件の掲載紙面・発行元名も検索されているから実質的に「科学」には及ばない。「国家」43289「宗教」54511「民族」2327も比べものにならない。占領期は「科学」時代である。ただし、「文化」と同様に戦前・戦中も多用されていたから、内容に即した分析が必要である。

ちなみに、メディア媒体と情報世界でいうと、「出版」138687「映画」68534「ラジオ」10482「電話」4981の順で、まだ見ぬ「テレビ」も674件の情報がある。「情報」27765は戦時の名残か「言論」5724「諜報」53を圧倒し、「世論」7333「輿論」2479「世論調査」978も日常語になっている。ただし「洋裁」28899「ミシン」2320といった実用情報が好まれ、「実話」4886「真相」4258「スパイ」1529もこの時代を特徴づける。

スポーツでいえば「野球」32530「ベースボール」4424「高校野球」1793が別格で、「相撲」2722「水泳」2249「柔道」1959「サッカー」198「剣道」143等を圧倒する。「ダンス」5289が多いように見えるが、実はこれはデータベースの欠陥で、濁点が区別されず家具の「タンス」も含まれている。

■「文化」と「教育」に支えられた「科学」と「科学者」

では「科学」時代401010の内実は何か。「自然科学」3203「社会科学」2665「人文科学」2409といった分類が問題ではない。「自然」9599「人間」8330「環境」2108「文明」1616といった原理的星座よりも、もう一つの大星雲「文化」194821と重なっていたようだ。「科学者」2218「法則」727「原理」1919「本質」1886「現象」2159「実体」871「理論」4589「実践」2475といったタームとつながっていたにしても、「文化国家」437という当時の未来イメージのバックボーンになっていたと考えられる。「技術」38948「技術者」1675から「発明」46654「発見」6587「特許」46400「著作権」167「電気」40224「鉄道」34182「石炭」11048「電力」7320「石油」

4401にもつながる。ただし「国鉄」29449の場合は、「労働組合」「スト」「デモ」「共産党」「メーデー」の星団と連なっていただろう。

もうひとつは、「学校」167833「教育」149665との親和性である。「青年」191320「大学」112805「学生」20354にも近い。「民科」1043「学術会議」856「文化人」1423「知識人」371「インテリ」467よりはるかに広い領域で、「科学」は「文化」「教育」の基礎、「夢」16278「希望」12824「期待」6858の源泉になっていたと思われる。クロス検索では「科学 文化」16455「科学 教育」8467「平和 科学」667「平和 原爆」203である。

この時代にマルクス主義理論が支配的であったというのも神話ではないか。「マルクス主義」202「唯物論」356「弁証法」305「独占資本」254「土台」129「上部構造」5「マルクス・レーニン主義」37「スターリン主義」16「全般的危機」5「生産力」621「生産関係」111「生産様式」38「イデオロギー」280等々いわゆるマルクス主義用語は、「論壇」1143の一部での使用にとどまる。一般用語として企業名等にも用いられる「帝国」17275とマルクス主義で多用された「帝国主義」188の落差、「天皇」5464と「天皇制」688のギャップが、おおむね現実の流通範囲を示すものだろう。共産党員が侵略戦争に反対して長期の獄中生活を送った実績、「天皇制」に挑戦してこの言葉を党内用語から社会科学一般用語に転換させた影響力は認められるが、むしろ「民主」「自由」「労働組合」など当時の全般的流れの中に合法的居所を得た程度であろう。「科学」の一部として認知されたとしても、それはせいぜい「科学者」2218「インテリ」467「知識人」371の範囲内である。

■「国連」「天皇」なみの「原子」小星雲

以上の概観を踏まえ、「原爆」「原子力」報道を、占領下の情報宇宙に投げ込んでみよう。10月研究会報告後、最大スケールで「原子」4349件を拾い、「原子爆弾」1474「原爆」1385「原子力」1593と共にサンプルに用いた。キーワード検索では別個に現れる「放射能」219「ピカドン」

90「アトム」288「ウラン」539件の記事もあわせて検討した。

「原子」4349件は、歴史的事象でいうと「国連」4987「復員」4730「賠償」3958などと並び、「天皇」5464や「終戦」5888のヒット数に近接する。普通名詞でいえば「広告」5340「電話」4981「理論」4589「失業」4494「台風」4318「進歩」3091なみで、人名でいえば「トルーマン」4029「マッカーサー」3917以上の頻度である。物理学上の分子・原子概念や人名・地名との重複はほとんどないので、「原子爆弾」「原子力」「アトム」を包み込む、一つの小星雲として扱うことができる。

いいかえれば、占領下でも原爆・原子力の問題は、「国連」「天皇」「失業」なみに報道され、論じられ、記事になっていたことを意味する。「科学」「文化」「教育」等の巨大な星雲中では目立たないにしても、内部を精査するに十分な情報量・データであると言える。

■ 占領下の「原子力の平和利用」解説者は戦時原爆開発関係者

個人名では、筆者が検索した約300名中で、「トルーマン」4029「マッカーサー」3917が最大である。「蔣介石」542「チャーチル」300「リンカーン」251「ル（ロ）ーズベルト」105「アイゼンハワー」83「ガンジー」370「孫文」79等の政治家世界で、社会主義ソ連の「スターリン」1274、中国の「毛沢東」472は、それなりの存在感を持つ。

日本人名では「吉田茂」1422「石橋湛山」1235「片山哲」1200が最大で、「徳田球一」278「野坂参三」254「山川均」159「伊藤律」127が左翼政治家の認知度を示す。

「科学」「文化」の世界でいえば、「ゲーテ」948「ノーベル」368「ニュートン」352「プラトン」163「ケインズ」152「アインシュタイン」138「ウェーバー」113等で、「マルクス」842「レーニン」393「エンゲルス」134も拮抗している。

戦後に「原爆・原子力」を解説し、「原子力の平和利用」を唱えた「専門家」は、ほとんど例

外なく戦時日本の原爆開発の担い手であった。陸軍主導の東大・理研「二号計画」に仁科芳雄、嵯峨根遼吉、武谷三男ら、海軍がスポンサーの京大荒勝文策研究室「F号計画」に湯川秀樹、坂田昌一らが動員された。ただし研究費も乏しく初歩的段階にとどまった。

占領期の「湯川秀樹」（初代原子力委員会委員）134はノーベル賞受賞報道を含む別格で、「武谷三男」128「渡辺慧」（原子党宣言）88「仁科芳雄」68「崎川範行」62「嵯峨根遼吉」（長岡半太郎五男）37「藤岡由夫」（初代原子力委員）37「伏見康治」30「長岡半太郎」（日本学士院長）23「坂田昌一」17「朝永振一郎」14「茅誠司」14「武田栄一」13等々である。社会科学では「平野義太郎」260が「原子力の平和利用」の最初の提唱者になる。

注目すべきは、武谷三男である。坂田昌一と共に占領期を代表するマルクス主義自然科学者だが、社会科学の「大内兵衛」167「蠟山政道」116なみ、「有澤広巳」94「丸山真男」65以上のメディア露出度であった。実際武谷は占領期に多くの著作で「原爆」の威力と「反ファシヨ」性格を解説し、「原子力の平和利用」の伝道師となった。

3 「唯一の被爆国」でなぜ「ヒロシマからフクシマへ」の悲劇が？

■ 出発点としての嵯峨根遼吉『原子爆弾』

以下は、本来上述の的方法的手続きをくぐったうえでなさるべきだった、筆者の20世紀メディア研究所研究会2011年10月報告のうち、直接ブラング文庫のキーワード・クラウドで把握された「原子力」関連データの解析である。

出発点におくべきは、嵯峨根遼吉『原子爆弾』である。朝日新聞社から敗戦直後、1945年10月に刊行された。嵯峨根は、当時の日本学士院長長岡半太郎の5男で戦時日本陸軍の原爆開発（理研仁科芳雄が指揮する「二号研究」）に加わった東大理学部教授、後の中曽根康弘・正力松太郎の原爆導入との関係でも重要で、中曽根に

アメリカで原子力を教えた。

『日米会話手帳』と同時期に、すでにプレスコードがあるもとの、朝日新聞社は「被害状況」＝爆風・火傷・放射能まで含め広島型ウラン原爆を解説した啓蒙書を出していた。当時はなお米国マンハッタン計画が継続中で、日本では知られておらず、長崎型プルトニウム爆弾は想定されていない。放射能被害についても触れているが、半減期が短く「数ヶ月後には動植物には大して影響ない」としている。この点が、占領軍の眼鏡にかなったといえなくもない。「人類への熱源の供給」を展望し、「大規模な原子核反応の研究」を要望している。「原子力の平和利用」論の、戦後の端緒である。

この頃ドイツのヴェルナー・ハイゼンベルグらナチスの原爆開発に関わった核物理学者は、連合軍により逮捕されイギリスで訊問を受けていた。嵯峨根は日本の原爆開発計画における仁科芳雄の右腕で、サイクロトロンに詳しく、『原子爆弾』は、意地悪くいえば、戦犯追迫を免かれた戦時日本の物理学者による原爆研究の初歩的到達点を示す書である。朝日新聞社は、その後『科学朝日』『朝日評論』等でも嵯峨根を多用する。

嵯峨根遼吉は、当時の保守的支配層の中で、原子力の科学研究と技術＝実用化・産業化を媒介し、茅誠司・伏見康治・藤岡由夫の背後で、ちょうど左派＝革新勢力の中での武谷三男と似た役割を果たした。占領軍に協力して日本の科学技術体制の民主化、日本学術会議創設に関わりながら、学術会議の第一回公選で落選したことが後々までトラウマになった。1949年『原子爆弾の話』（講談社）を出してアメリカに渡り、56年帰国後日本原子力研究所副理事長・産業計画会議委員・日本原子力発電副社長などを勤めた。

■ 雑誌・新聞では45年9月『科学朝日』から「原子力の平和利用」

雑誌でも新聞でも「原爆」「原子爆弾」報道は、外電を含め1945年9月からみられる。『科学朝日』

45年9月1日「原子エネルギーの利用：平和再建のために」が先駆で『科学朝日』は11月号「原子爆弾の副産物」「原子機関車登場か」と、その後の朝日新聞社の報道姿勢を先取りする。研究社の『中学生』も「原子爆弾に鑑みる」を掲載する（45年9月1日）。

CCDの検閲は、『中国新聞』では厳しかったが、『佐賀新聞』など九州ではそれほどでもなかった。プレスコードがあっても、『佐賀新聞』は「原子弾講演」（45年9月30日）、「原子弾の公開反対：米の軍事視察団覚書」（10月3日）以下、45年9-12月に10数本の「原爆」報道があり、すべて検閲はフリーパスだった。言論の自由が制限されていたことは間違いなく、占領軍や米国への直接批判は出てこない。とはいえ一部の大手メディアが「自主規制」しても、雑誌や地方新聞は報道を続けた。別に「抵抗」というほどの姿勢ではない。

国際関係の中での原爆管理問題、原子力の解説や原子爆弾の仕組み、原爆被害の報道や医学的調査報告、原爆体験記・子供向け解説も、1945年からみられる。『文藝春秋』45年10月1日には「原子爆弾と斬込特攻隊」「原子爆弾雑話」とエッセイが出始める。いち早く現地に入った都築正男教授の「所謂原子爆弾について：特に医学の立場からの対策」は『総合医学』45年10月1日に出ている。ただし厳しい検閲を受ける。「広島に於ける原子爆弾戦災犠牲者」は『日本互換技術協会誌』45年11月25日号にある。

1945年12月には、雑誌『科学世界』に「機関車に原子力を」、『雄鷲通信』に「原子力の工業化は前途遼遠」「原子力自動車」「原子力発電機スピードトロン」が出て、戦後日本の「原子力の平和利用」へのあこがれが、本格的にスタートする。

■ J・ダワーの言う「長崎原爆美人コンテスト」とは？

今日広く読まれているJ・ダワー『敗北を抱きしめて』（岩波書店、増補版、2004、上巻305頁）には、「厄介だったのは、日本人の占領軍への

対応の仕方が例を見ないほど無邪気で、親切で、浅薄だったことである。たとえば原爆が投下された長崎においてさえ、住民は最初に到着したアメリカ人たちに贈り物を準備し、彼らを歓迎した。……住民たちは、駐留するアメリカ占領軍人とともに『ミス原爆美人コンテスト』を開催した」とある（ダワーの典拠は、US - Japan Women's Journal: English Supplement, No.12,p.109,1997）。

『産経新聞』2005年7月31日が検証したように、このミスコンテストは、占領軍長崎地方プレス班が主導し、毎日新聞、西日本新聞、長崎新聞の3紙が主催していた。ただし日本側各新聞社は「ミス長崎」と表現しており（『毎日新聞』1946年5月3日）、「ミス原爆」とは米国人が内部で使った呼称だった。J・ダワーが問題にしているのも、「ミス原爆」の呼称のみではなく、この時期に長崎で「ミスコンテスト」で歓待しようとする日本人の占領軍への「無邪気で、親切で、浅薄」な態度、敗北の「抱きしめ」方である。

もっとも「原爆アレルギー」どころか、被爆地に「ミス原爆」が現れても不思議ではないメディア状況は実在した。例えば阪神「ダイナマイト打線」に対する巨人の「原爆打線」（『スポーツファン』1948年8月4日）といったプロ野球報道である。「桑原武夫の放った原爆『現代俳句第二芸術論』」（『新潟評論』48年1月8日）、「音楽界の原子爆弾」（『月刊山陽』49年9月）、「金融界に原子爆弾を投じた」（『西日本新聞』49年3月7日）といった比喩的用法もある。「強力な、衝撃的、破壊的」の意で、悪い意味ではなかった。

■ 朝日新聞社の報道責任と田中慎次郎の役割

『朝日新聞』は2011年10月から夕刊連載「原爆とメディア——『平和利用』への道」で、自社報道を含むメディアの戦後を検証し始めた。しかし、不十分である。

1941年創刊『科学朝日』は、最新兵器の特集が売り物だった。敗戦直前45年7月号で、「どんぐりの食糧化」と並んで「ウラニウム原子爆弾」が紹介された。そこに広島・長崎の原爆投下

である。すると45年9月号は早くも「原子エネルギーの利用——平和再建のために」と転身し、11月号「原子爆弾の副産物」「原子機関車登場か」へと、あたかも敗戦などなかったかのごとくに「科学」の最先端を追う。嵯峨根遼吉の啓蒙書は同社刊だった

1946年1月22日『朝日新聞』社説「原子力時代の形成」は2011年10月12日記事で検証されたが、47年2月29日にも社説「原子力の平和利用」がある。48年2月29日には「原子力に平和の用途」で、さまざまな「夢」をかき立てていた。「フクシマの悲劇」の地点からより深刻なのは、『こども朝日』1947年10月号でのこどもたちへの報道「平和に原子力、すばらしい威力を世界の幸福に利用」であろう。

後の原発導入との関わりで、CIA エージェント正力松太郎の『読売新聞』、日本テレビを動員したAtoms For Peace キャンペーンが今日クローズアップされているが、「原発とメディアの責任」の考察においては、占領期の朝日新聞社報道の役割、その中心で、読売の正力に比べれば紳士的で学術的だった論説委員田中慎次郎の役割も見逃せない。32件の論説・記事があり、他社メディアにも登場して米ソや国連での核管理問題を論じた。

4 「原子力の平和利用」は占領期から日本民衆の夢

■ 「原子力の平和利用」は平野義太郎、仁科芳雄、武谷三男も

よく知られているように、マンハッタン計画の発案者レオ・シラードは、SF作家H・G・ウェルズのファンで、大きな影響を受けていた。ウェルズこそ「透明人間」や「宇宙戦争」「タイムマシン」と共に、想像上の「原子エネルギー（Atomic Energy）」「原子爆弾（Atomic Bomb）」の創始者で、核兵器による世界戦争の危険と世界政府の必要性を予見していた。その科学小説『解放された世界』（岩波文庫）は実に1913年の作品であった。

もともと1945年8月6日広島原爆投下時の米国トルーマン大統領声明には、「原子エネルギーを解放することができるという事実は、自然の力に対する人間の理解に新しい時代を迎え入れるものである。将来、原子力は、石炭、石油、降雨から得ている現在の動力を補うことができるかもしれない」と「平和利用」の可能性が示唆されていた。

日本でも、日本軍が戦時原爆開発に着手するはるか以前から、科学評論や空想科学小説（SF）・戦記小説の中で、核エネルギーが注目されていた。モダニズム雑誌『新青年』1920年8月岩下孤舟「世界の最大秘密」に始まり、「日本に居て米国の市街を灰燼に帰せしめる」原子爆弾の威力の裏面で、「原子力家庭」の家庭電化も夢見られた。原爆被爆国となっても、原子力エネルギーそのものは「平和利用」しうるものと早くから認知されていた。

ブラング文庫のキーワード検索で「原子力の平和（的）利用」言説17件に限定すれば、1946年9月の雑誌『全体医術』と、同月の仁科芳雄・横田喜三郎・岡邦雄・今野武雄による座談会「原子力時代と日本の進路」（『言論』46年8/9月号）に現れる。こどもたちの世界では、『中学上級』47年2月号「科学の新知識」で使われ、前述朝日新聞社『こども朝日』47年10月号「平和に原子力、すばらしい威力を世界の幸福に利用」が続く。

学術論文としては、マルクス主義法学者の平野義太郎「戦争と平和における科学の役割」（『中央公論』1948年4月号）が小見出しに用いた先駆であるが、内容的にはもっと早くから、もっと啓蒙的なたちで現れていた。

雑誌『自然』1946年5月仁科芳雄「日本再建と科学」は、「原子爆弾の今後の発達を恐らく戦争を地球上より駆逐するに至るであろう。否、吾々は速かに戦争絶滅を実現せしめねばならぬ。然らざれば人類の退歩、文化の破滅を招来することとなるからである。原子爆弾は最も有力なる戦争抑制者といはなければならぬ。戦争のな

くなつた平和の世界に於ける吾々の物心両面の文化は如何に豊かなものであらうかを考へただけでも、科学の人類発達に及ぼす影響の大きさが知れる」とし、『世界』47年1月「原子力問題」では「原子力はむしろ徐々に発生させることの方が、爆発させることよりも易しいのであるから、利用の可能性は多分に存在する」と太鼓判を押す。

武谷三男は、マルクス主義物理学者として日本共産党、民主主義科学者協会（民科）の占領期「原子力」観に決定的ともいえる影響力を持った。『日本評論』1947年10月「原子力時代」などで、戦時中に仁科研究室で原子爆弾開発に携わった体験を交えつつ、戦争を終結させた原子爆弾の「反ファッショ的性格」「原子力解放の偉業」を強調した。レーニンの「社会主義＝ソヴェト権力プラス電化」の延長上で、先の仁科や後の「抑止力」に通じる「原子爆弾が戦争防止の有力な契機になる事」を論じ、大出力の原子力発電は利潤追求の資本主義には適さず、社会主義の計画経済で初めて可能となることを説いた。後にこの「原子力時代」認識は時期尚早で、現代はなお「原水爆時代」だとして原発建設に反対するが、科学技術発展による「平和利用の可能性」を信じる、その理論的骨格は変わらなかった。

つまり、当時の思想的・政治的立場、専門領域の違いを超えて、「原子力は人類を幸福にする」（嵯峨根遼吉、『講演』48年11月）という考え方は、占領期日本の言論空間である種の共通理解だった。

■ 『中国新聞』は検閲多いが「原爆・原子力」報道の宝庫

広島『中国新聞』にも、多くの「原爆」「原子爆弾」記事がある。1946—48年で164件を抽出でき、全体の1割を占めるから、「原爆」報道研究の格好の素材である。検閲が多いのが特徴で、57パーセントの94件が「検閲有」である。

ところが内部に立ち入ると、検閲された多くは米ソの原爆開発競争や国連原子力管理案をめ

ぐる外電報道で、広島に地元記者たちは、1946年3月25日にビキニ環礁核実験で「原子力の漏洩心配なし・ローズ少将談」を報じた外電が検閲をパスしたのを皮切りに、5月13日『「爆弾症」その後の状況はかうだ」、5月15日「東大原子爆弾症診療班来広」、6月11日「原子爆弾―その後発育不良―アメリカ海軍では長崎型が『虎の子』とウラン型とプルトニウム型の違いも報じる。7月12日「数裡離れたビキニ環礁を―鮮やかにキャッチ―近いテレビ実用」は、原爆実験と平行した遠隔映像放送＝テレビの実用化と結びつける。

原爆投下1周年が近づくと、46年7月26日「強力な武器としてのみに利用されている原子爆弾を食糧増産に利用したらどうか」と提案するまでになり、8月1日「原子爆弾落ちて一年―天降る『平和の序曲』」、8月6日「けふぞ巡り来ぬ平和の閃光」「広島市の爆撃こそ原子時代の誕生日―米科学者連盟会長の談」と1周年が記念される。

以後の『中国新聞』は、48年5月4日「原子力の平和的利用法、偉大な発見近し」などと、他の地方新聞や雑誌と「原子力へのあこがれ」を共有する。

■「原子力の平和利用」に託されたさまざまな「夢」

原子力へのあこがれは、原子力発電ばかりではなかった。自動車・機関車・船・飛行機など交通手段の動力として、「機関車も燃料いらず、平和の原子力時代来れば」（『九州タイムズ』1946年11月27日）、「月世界・金星旅行の夢ふくらむ、今日原子力の記念日」（『西日本新聞』46年12月3日）と夢は広がる。

ラジウム療法などは戦前から知られていたから、「原子力の医学的利用」（『海外旬報』46年6月10日）、「平和のための原子力時代来る、新ラジウム完成す、安価にできるガンの治療」（『京都新聞』48年8月8日）はもとより、「お米の原子力時代」で農業増産（『生活科学』46年10月）、「農民の夢、原子力農業」（『明るい農家』

49年6月）、または「農家を悩ます颱風の道、原子力で交通整理」と原子爆弾で台風の進路を変えることさえ夢見る（『中国新聞』46年7月26日）。寒冷地北海道の科学普及協会『新生科学』48年12月号は「科学の目：近く原子力暖房」という具合である。

つまり原子力は、敗戦・復興期の日本人の夢だった。それは人類史を画する新しい時代とされた。『科学の友』1949年3月号の「進歩してきた人類の文化」は、旧石器時代・新石器時代・青銅器時代・鉄器時代と世界史を辿り、フランス革命時代・産業革命時代・大戦時代を経て、ついに「原子力時代」に到達する。

広島と共に原爆を経験した長崎でも、「平和にのびる原子力、破壊→幸福の力→建設、驚異・300倍の熱量、航空機・自動車・医療へ実用化」と原爆記念日に語られる（『九州タイムズ』49年8月9日）。「平和のために闘う原子力」は『科学画報』49年4月にあり、「原子力は第2の火、人間は別種の動物に進化」（『長崎民友』49年1月1日）と讃えられ、原子力は「歴史を進める」主体、「文明」「進化」「進歩」の象徴となった。

■労働組合も共産党もソ連原爆実験成功で「社会主義こそ平和利用」

当時の華やかな労働運動のなかでも、たとえば全通信労働組合広島郵便局支部の機関紙は『アトム』と命名され（1947年9月20日）、国鉄労組東京鉄道教習所『国鉄通信教育』48年12月号は「第2の火の発見―原子力時代」を「教養」欄で論じる。宇部セメント労働組合青年部の機関誌創刊号が『原爆』と名付けられたのは（49年3月1日）、「原爆を神風にする道」（『北日本新聞』49年8月6日）が唱われた時代であるから、強力な闘争の意であろうか。北越戸田労働組合の機関誌『暁星』にもコラム「原爆室」がみられ（48年9月5日）。左翼・革新勢力ほど、「原爆アレルギー」にはほど遠いようだ。

特に1949年は1月総選挙で共産党35議席の大躍進、夏に下山・三鷹・松川事件、10月毛沢東の中華人民共和国建国宣言、その直前にソ連

初の核実験成功発表である。すでに志賀義雄「原子力と世界国家」（日本共産党出版部『新しい世界』48年8月）等で「社会主義の原子力」の夢を語っていた共産党は、「光から生まれた原子、物質がエネルギーに変わる、一億年使えるコンロ」（日本共産党出版部『大衆クラブ』49年6月号）とボルテージをあげる。その頂点がこの頃流布した日本共産党書記長徳田球一「原爆パンフ」である。

「原爆パンフ」とは、『新しい世界』1950年1月新年号に掲載された徳田球一「原子爆弾と世界恐慌を語る」という49年11月18日談話である。すぐに『原子爆弾と世界恐慌』（永美書房）という政治パンフレットになり、労働組合活動家やレッドパージで職を失った人々の間で広く読まれた。「なぜ資本主義社会では原子力を平和的につかえないか、なぜソ同盟では平和的に使えるのか、原子爆弾と共産主義、原子爆弾は最大の浪費である」と歯切れよく「社会主義の核」の優位を説き、今日まで続く左翼版「原子力の平和利用」論の原型となった。

■徳田球一の「原爆平和利用の夢」と武谷三男の「社会主義の夢」

それは、独占資本主義のもとでは原子力は「動力源としては使えず、爆弾としてしか使えない」、なぜなら原子力を動力源にすると資本主義は生産過剰になり世界恐慌に突入する。それに対してソ連では平和産業が発展する。原爆で「おおきな河を逆の方向に流れさすとか、大きな山をとっばらって」「これまで不毛の地といわれたひろい土地が、有効に使われる」。そこに「ミチューリンの方式で、新しい作物をどしどし適応させてゆく。そうすると、生産力の飛躍的な拡大となる。蒙古でもゴミの砂漠でも、新疆でも、ヨーロッパの文明圏の何倍もあるような不毛の土地が、原子力のおかげで、緑のしたたるような、ゆたかな沃野にかわっていく」「原子力を動力として使えば、都市や工場のあらゆる動力が原子力で動かされ」、冷暖房自在で「飛行機、船舶その他ありとあらゆる動力として、

つかえる」「そうすると、生活必需品も、物質の洪水みたいに、ありあまるほどつくれる」。

この壮大で、今なら荒唐無稽な徳田球一の夢には、それなりの「科学的」裏付けがあった。「原子核分解のときにでるエネルギーを、爆発力つまり爆弾としてつかうだけでなく、そのエネルギーを適当に人間が管理し、制御していけば、りっぱにできる」という徳田球一のアジテーションの背後には、実は当時の「原子力」解説の第一人者武谷三男の理論的裏付けと、武谷三男・坂田昌一・伏見康治らを含む民主主義科学者協会（民科）自然科学者たちの共産党支持があった。いわば「原爆の平和利用」である。

ちょうどこの徳田談話の頃、民科技術部会主催の「日本産業の現状と技術の諸問題」と題する連続講演会が開かれ、平野義太郎「資本主義法則と科学技術」、武谷三男「原子力産業と科学技術の行方」に続き、徳田球一講演「科学と技術におけるマルクス・レーニン主義の勝利」がもたれた。それは朝鮮戦争勃発時の1951年6月に民科技術部会『資本主義法則と科学技術』（真理社）という書物にまとめられるが、徳田は「先ほどの武谷先生の話」を受けて、ソ連原爆実験成功の「現実」を語る。武谷自身は徳田のような粗野な原子力の「夢」は語らなかつたが、「社会主義＝ソヴェト権力プラス電化」は武谷の「夢」であったから、徳田の話は武谷理論に裏付けられたものとして一般に流布した。スターリン70歳誕生日（12月21日）を祝う国際的ソ連崇拜と毛沢東の新中国建国が、「夢」と「現実」の混濁、科学とイデオロギーの合体を加速した。ソ連の原爆実験成功は、第1に荒野の開墾・開発の「原爆の平和利用」として、第2に「アメリカ帝国主義」に対抗して第3次世界大戦を阻止する「平和のための防衛的核＝抑止力」として位置づけられた。

かくして1950年1月18日の第18回拡大中央委員会報告、いわゆる「コミンフォルム批判」を受けての日本共産党の自己批判は、冒頭「国際的規模で前進する人民勢力」で「ソ同盟にお

ける原子力の確保は、社会主義経済の偉大な発展を示すとともに、人民勢力に大きな確信をあたえ、独占資本のどうかつ政策を封殺した」「原子力を動力源として運用する範囲を拡大し、一般的につかえるような、発電源とすることができるにいたったので、もはや、おかすことのできない革命の要塞であり、物質的基礎となっている」と宣言し、ソ連共産党と中国共産党に指令された朝鮮戦争後背での地下活動・軍事闘争に突入する。非合法化と党分裂により自滅していくが、「原子力の平和利用」は、社会主義革命・共産主義社会の到来とほとんど同義の「見果てぬ夢」として、21世紀まで保持される（その詳細は、2011年12月10日同時代史学会報告「日本マルクス主義はなぜ原子力にあこがれたのか」で述べ、「キーワード・クラウド」と共にウェブ上の「ネチズンカレッジ」に掲載したので参照されたい、<http://members.jcom.home.ne.jp/katote/marxatom.pdf>）。

5 「鉄腕アトム」にも「はだしのゲン」にも通じる両義性

■ 原爆・原子力を中性化する「アトム」「ピカドン」は漫画や物語に

しかしまだ、「原爆」や「原子力」の言説クラウドでは、「原子力戦争は人類の破滅」（『週刊東洋経済』1949年4月24日）、「原子力と共産党員、用途は平和か武器か」（『九州タイムズ』49年2月25日）、「天国の裏は地獄である、我々は何れを選ぶか」（『農民クラブ』49年6月）、「ソ連の原子爆弾で戦争の危機緩和か、原子爆弾に使われる危険」（『週刊東洋経済』49年10月15日）などと「原爆の裏面の平和利用」への留保があり危惧もされる。

占領軍GHQの検閲はあらゆる出版物に及び、原爆を落としたアメリカへの批判や広島・長崎の放射能被害の継続、内部被曝と晩成被害は隠蔽された。「ソ連に原爆と殺人光線」といった記事は検閲され（『京都新聞』48年3月11日）、逆に「広島・長崎の原爆放射能消滅」というA

P電はフリーパスである（『北日本新聞』48年10月8日）。

ところが、「ピカドン」「アトム」とカタカナになると、あまり抵抗感なく受け入れられたようだ。カタカナの魔力は、「ピカドンと婦人、広島病院のお答え、不妊の心配なし、奇形児も生まれませぬ」（『中国新聞』1946年7月10日）などに使われ、『佐世保時事新聞』48年8月2日は、原爆記念日を前に「アトムの街々」特集を組み、「広島と長崎、それは原爆の地として世界注視のうちに新しい平和を求めて起つところ、人類に原子力時代到来を願って今こそ戦後の世界復興を」と訴える。

広島・長崎を「アトム都市」とする記事は1947年から現れ、47年12月の昭和天皇の広島行幸は、「お待ちするアトム広島」（『九州タイムズ』47年12月1日）、「ピカドン説明行脚、天皇がアトム広島に入られた感激の日」（『中国新聞』47年12月11日）のように使われる。48年の長崎原爆記念日は、「祈るアトム長崎、3周年記念、誓も新た平和建設」と報じられた（『西日本新聞』48年8月10日）。爆心地は「浦上アトム公園」と命名され（『熊本日日新聞』48年8月10日）、「アトム公園を花の公園に」とよびかける（『長崎民友』49年3月24日）。

これが、こどもたちの世界では、原子力をエネルギーとするロボットや怪物に化身する。戦前「放送された遺言状」（1927年）から原爆を描いてきた海野十三「原子力少年」（『子供の時間』48年9月）、「少年原子艇長」（『小学六年の学習』49年4月）連載のほか、「アトム先生とボン君」（『こども科学教室』48年5月1日）、中野正治画「ゆめくらぶ・ミラクルアトム」（『漫画少年』48年8月20日）、和田義三作連載マンガ「空想漫画絵小説：アトム島27号」（『冒険世界』49年1月1日）、原研児「科学冒険絵物語アトム少年」（『少年少女譚海』49年8月1日）と、ほとんど無防備で「夢の原子力」へと一直線にワープする。かくして手塚治虫「鉄腕アトム」（「アトム大使」1951年）の登場やビキニ水爆



後の映画「ゴジラ」（1954年）出現は、時間の問題だった。

■ ヒロシマ「あとむ製薬」の滋養強壮薬「ピカドン」

ブランゲ文庫「占領期新聞・雑誌情報データベース」では、広告欄と広告文も拾われている。『愛媛新聞』1949年1月13日広告に、「あとむ製薬」から「ピカドン」という薬が売り出されていた。調べて見ると、「あとむ製薬」は、1948年広島市安芸区に設立された薬種会社で、その後も社名を変えて今日まで存続している。その社史によると、「あとむ製薬」は、もともと漢方薬から出発しており、「ピカドン」は新発売の滋養強壮剤だった。

しかも「ピカドン」は、中国・四国地方の専売特許ではなかった。ウェブ上の「お薬博物館」には、「あとむ製薬」とは別の富山県黒部産「風邪にピカトン」という置き薬（1包40円）が写真入りで収納されている。富山市電子図書館にも、「かぜに新ピカトンM（Ueshima製薬所）」があり、「かぜによくきくピカドン」をあしらった「ピカドン紙風船」（奈良県高市郡高取町産）もある。

つまり朝鮮戦争期の日本には、「ピカドン」（「ピカトン」であっても包み紙から瞭然）という薬が、広島と富山から発して、当時は普通に見られた富山の薬売りの行商を通じて全国に流通し、

家庭に入った。1945年に広島・長崎市民の生命を一時にして奪った原爆が、5年もたたずに、その強力なエネルギーゆえに日本人の健康を守り強壮にする家庭常備薬に変身する。50年代に人形峠でウラン鉱脈が見つかる、「ウラン風呂」から「ウラン野菜」「ウラン饅頭」まで出現する前兆である（武田徹『私たちはこうして「原爆大国」を選んだ』中公新書、2011年）。

無論、「ピカドン」といえば、丸木位里・俊夫妻の絵本『ピカドン』が想起される。1950年ポツダム書店から発行され、GHQの事後検閲により発行禁止処分にあった。今日では、「ピカドン」に原爆の悲惨や戦争の記憶をだぶらせる中沢啓治『はだしのゲン』や被爆者肥田舜太郎医師の回顧もある。ウェブ上の『「ピカドン」が憎い』という小谷静登の叫びは、今でも多くの人々の心を打つ。

同じヒロシマに発する、この「ピカドン」への二重性、一方で「ピカドン」を憎み、呪い、他方で「ピカドン」に生命力の回復を託す心性こそ、1954 - 55年に原水爆禁止運動と「原子力の平和利用」＝原爆導入を同時出発させる、戦後日本の両義性の原型であろう。

「唯一の被爆国」や「核アレルギー」は、その後創られる神話である。

◆ 執筆者紹介

山本武利 やまもと たけとし

1940年生まれ。早稲田大学名誉教授。一橋大学名誉教授。一橋大学大学院社会学研究科博士課程修了。博士(社会学)。専攻はメディア史、情報史。「占領期メディア分析」法政大学出版局、1996年。「ブラック・プロバガンダ」岩波書店、2002年。「朝日新聞の中国侵略」文藝春秋、2011年。

坂口英子 さかぐち えいこ

アメリカ合衆国メリーランド州立大学図書館東アジア資料室・プランク文庫室長。ロイヤル・メルボルン工科大学ビジネス情報学修士号。野田宗実・坂口英子編「メリーランド大学図書館所蔵ゴードンW.プランク文庫教育図書目録：占領期検閲教育関係図書1945-1949」文生書院、2007年。Sakaguchi, E., 他著 "A Cross-Pacific partnership: The University of Maryland Libraries and the National Diet Library of Japan jointly reformat Children's books", *OCLC Systems & Services*, v. 26, no. 1 (2010) p. 18-28. 他。

加藤哲郎 かとう てつろう

1947年生まれ。早稲田大学大学院政治学研究所客員教授・一橋大学名誉教授。東京大学法学部卒業。法学博士。「ワイマール期ベルリンの日本人」岩波書店、2008年。「情報戦の時代」花伝社、2007年。「象徴天皇制の起源」平凡社、2005年など、多数。

川崎賢子 かわさき けんこ

1956年生まれ。文芸評論家。日本映画大学教授。東京女子大学大学院文学研究科修了。専攻は近代日本文学・文化。「『新青年』読本—昭和グラフィティ」(共著)作品社、1988年。「彼等の昭和」白水社、1994年。「岡田桑三映像の世紀」(共著)平凡社、2002年。「読む女書く女」白水社、2003年。「宝塚というユーピア」岩波新書、2005年。「尾崎翠 砂丘の彼方へ」岩波書店、2010年。「占領期雑誌資料大系 文学編」(全5巻)共編、岩波書店、2009～2010年。

小林聡明 こばやし そうめい

1974年生まれ。東京大学大学院総合文化研究科客員研究員、ソウル大学日本研究所客員研究員。一橋大学大学院社会学研究科博士課程修了。博士(社会学)。「『在日朝鮮人のメディア空間』(風響社)。共著『占領する眼 占領する声—CIE/USIS映画とVOAラジオ』東京大学出版会、近刊。「日米同盟論」ミネルヴァ書房。「文化冷戦の時代」国際書院。論文「VOA施設移転をめぐる韓米交渉」(『マス・コミュニケーション研究』日本マス・コミュニケーション学会優秀論文賞)など。

池 貞姫 ち ちよんひ

1963年生まれ。愛媛大学法文学部准教授。大阪外国語大学大学院外国語学研究所修士課程修了。「プランク文庫に見る占領期

の朝鮮語教科書について」『愛媛大学法文学部論集人文科学編』32、愛媛大学法文学部、2012年。「『使える朝鮮語』(共著)白水社、2006年。

土屋礼子 つちや れいこ

1958年生まれ。早稲田大学政治経済学術院教授。一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程修了。博士(社会学)。専攻はメディア史、大衆ジャーナリズム史。「大衆紙の源流」世界思想社、2002年。共訳「米国のメディアと戦時検閲」法政大学出版局、2004年。編著「近代日本メディア人物誌—創始者・経営者編」ミネルヴァ書房、2009年。「対日宣伝ビラが語る太平洋戦争」吉川弘文館、2011年。

井川充雄 いかわ みつお

1965年生まれ。立教大学社会学部教授。一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程単位修得退学。博士(社会学)。「戦後新興紙とGHQ」世界思想社、2008年。「冷戦期におけるVOAのリスナー調査—日本語放送を例に」(『応用社会学研究』51号、立教大学社会学部、2009年。「もう一つの世論調査史 アメリカの『広報外交』と世論調査」(『マス・コミュニケーション研究』77号、日本マス・コミュニケーション学会、2010年)

白水祥太郎 しろうず しょうたろう

1978年福岡県生まれ。青山学院大学大学院国際政治経済学研究所修士課程修了。現在、早稲田大学大学院政治学研究所博士後期課程在籍。専門分野は情報史、国際政治史、地名研究。

五味潤典 ぐみづみ のりつぐ

1973年生まれ。大妻女子大学文学部准教授。慶應義塾大学大学院国文学専攻博士課程単位取得退学。「言葉を食べる 谷崎潤一郎、一九二〇—一九三二」世織書房、2009年。「甲斐のない多忙—戦時下日本語学論序説」『文学』隔月刊、2010年3月。「『婦人公論』のメディア戦略—〈円本〉以後の出版流通の観点から」『大妻女子大学紀要—文系』第39号、2007年3月。

鈴木貴宇 すずき たかね

1976年生まれ。早稲田大学教育学部複合文化学科非常勤講師。東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻博士課程満期退学。単編著「ライブラリー—日本人のフランス体験 パリへの憧憬と回想—「あみ・ど・ぼり」I」柏書房、2009。「コレクショント・モダン都市文化30 表現主義」ゆまに書房、2007年。

原田健司 へらだ けんじ

1966年生まれ。編集者。過去に版元を経営し、書籍を出版。

編集後記

『Intelligence』Vol.12は、20世紀メディア研究所所長に土屋礼子氏を迎え、山本武利顧問、川崎賢子、小林聡明の編集体制による本誌第二期の二号目にあたる。昨年度より『Intelligence』購読者会員制度を設け、会員専用ウェブページからの情報発信も開始した。本誌の刊行とウェブページの維持に関しては、継続して文生書院のご助力をたまり、研究所事務局の境ひろ子氏が編集実務にあたってくださった。

2011年3月11日には東日本大震災にみまわれ、福島原発事故は現在なお収束をみていない。計り知れない被害に加え、経済的打撃は大きく、出版界も一時は紙不足で混乱した。教育や研究の場であっても、未曾有の天災と未曾有の人災の落とした影はぬぐいがたい。被災者の皆様には心よりお見舞い申し上げます。

占領期以降、原発安全神話をささえて現在にいたる新聞、TVなどのマスメディアに対する信頼は、震災と原発事故報道の過程で、すくなく揺らいだようにかがわれる。今こそ、情報を批判的に検証するジャーナリズム精神と、継続的に歴史のなかで事態を相対化する研究姿勢が求められている。時とともに熟する成果によって、記憶の風化にあらがうことができると、切実に願う。20世紀メディア

研究所も、危機と復興のメディアに関心を寄せつつ、研究会と本誌編集に力を注いだ。

今期20世紀メディア研究所においては、上のような困難な状況にもかかわらず、第59回から第65回まで研究会を重ねることができた。これも多くの皆様のご支援の賜物と感謝したい。

一方、研究所の有志は国際的な共同研究ワークショップに参画し、活動の場所を広げるよう努めている。2012年度以降は、高橋博文氏代表の日本上海史研究会と協力関係を持ち、共同研究を進めることになっている。今後ともインテリジェンス研究を中心に、プロバガンダ、検閲、東アジア・植民地・租界、戦争・占領期・戦後のメディアなどを主要な柱に、さまざまな領域の方に加わっていただき、研究会および『Intelligence』誌をより豊かなものにしていきたい。読者の皆様には一層のご後援、ご協力をたまりますよう、編集委員会も研鑽にはげみたい。

なお、20世紀メディア研究所顧問の山本武利先生を理事長とするNPO法人「インテリジェンス研究所」が2012年2月に認可され発足した。こののちはNPO法人が占領期新聞・雑誌情報データベースの管理などにあたることになる。こちらもあわせて皆様にご支援いただけますよう。

2012年3月 川崎賢子

Intelligence 第12号

2012年3月31日発行

発行 早稲田大学
20世紀メディア研究所
インテリジェンス編集委員会(代表 土屋礼子)
〒169-8050 東京都新宿区西早稲田1-6-1 早稲田大学1号館(110-1)
電話・FAX 03-5286-1988 E-mail: m20th@list.waseda.jp
URL <http://www.waseda.jp/prj-m20th/> URL <http://www.waseda.jp/prj-intelligence/>

発売 株式会社 文生書院
〒113-0033 東京都文京区本郷6-14-7 電話 03-3811-1683
URL <http://www.bunsei.co.jp/> E-mail: info@bunsei.co.jp

印刷 モリモト印刷株式会社

装幀 Twelve 戸上泰徳